

「かかわり」を考えた学習指導の工夫

－「運動大好き」「スポーツ大好き」という姿をめざして－

体育・保健体育科研究会議

山川 佳美¹

山室 忠敏²

尾立 富久美³

加賀 勉⁴

要 約

体育・保健体育科の「運動に親しむ資質や能力の育成」「健康の保持増進」「体力の向上」という具体的な3つの目標を具現化するためには、体育学習への意欲を高めることが重要となってくる。そのためには、授業づくりが鍵を握り、体育学習の充実を図ることが不可欠であると考えた。そこで、体育学習において今まであまり着目されていなかった「わかる（知識、思考・判断）」を切り口にして、「かかわりの充実」を図る授業づくりについて研究を進めた。また、小学校と中学校の9年間のつながりから指導と評価の一体化を見直し、球技における指導内容を検討した。そして、検討した内容を踏まえて「ボール運動領域系統表」「パス・キャッチの系統表」「指導・評価計画表」等を作成し、検証授業に取り組んだ。

検証授業から、児童生徒が指導された内容を理解することで、友達と励まし合い教え合うというかかわりの姿が見られた。さらに、理解した内容を通して技能の向上が図られ、技能を基に友達との学び合い高め合う姿も見られた。「わかる」「かかわる」「できる」がうまく機能することで、児童生徒の自信や満足感につながり、学習意欲の高まりを図ることができた。その結果、「わかる」ことで体育学習への意欲を高められることがわかった。

「わかる」ことを切り口にしながら、ボール運動と球技の領域だけでなくすべての領域において、9年間を見通した指導内容を見直し、指導計画や評価計画等を作成していくことが必要であると考ええる。そして、その小学校と中学校のつながりを見据えた指導内容を考えるような研究や研修を深めることが、今後の課題である。

キーワード：わかる、かかわる、できる、指導と評価の一体化、小学校と中学校のつながり

目 次

I 主題設定の理由……………114	5 検証授業1……………120
II 研究の内容……………115	(1)「わかる」を大切にすゝ指導……………120
1 研究の仮説……………115	(2)集団への意識と学習意欲……………121
2 研究の構想……………115	(3)指導内容と意識……………123
3 研究の方向性……………116	6 検証授業2……………124
(1)学びのある授業づくり……………116	(1)「わかる」を大切にすゝ指導……………124
(2)指導と評価の一体化……………116	(2)集団への意識と学習意欲……………124
(3)小学校と中学校のつながり……………117	(3)指導内容と意識……………126
4 研究の方法・内容……………117	III 研究のまとめ……………127
(1)研究の方法……………117	1 研究から見えてきたこと……………127
(2)授業研究の実施……………119	2 今後の課題……………127
(3)見取りの方法……………120	参考文献……………128
	指導助言者……………128

¹川崎市立向小学校教諭（長期研修員）

²川崎市立王禅寺小学校教諭（研修員）

³川崎市立野川中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立日吉中学校教諭（研修員）

主題設定の理由

小・中学校学習指導要領解説には、体育・保健体育科の具体的な目標として「運動に親しむ資質や能力の育成」、「健康の保持増進」及び「体力の向上」¹⁾の3つが示されている。また、特に、「運動に親しむ資質や能力の育成」については、「生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくための基礎を培うことを重視するために強調したものである²⁾」と記されている。

昨今、子どもたちの体力や運動能力の低下が叫ばれるとともに、「運動をする」と「運動をしない」の二極化が問題となっている。平成17年度に神奈川県立体育センターによる学校体育に関する児童生徒の意識調査が実施され、運動をしない理由に「運動をすると疲れる」「うまくできない」というものが挙げられており、本県においても体力低下と二極化が悪循環となっている傾向がうかがえる。そして、運動ができる・できないということと児童生徒の体育学習への意欲が関連していることを見取ることができる。さらに、子どもの意識の傾向としては「体育好き」と「体育嫌い」、「運動好き」と「運動嫌い」に分かれていることも見取ることができる。

このようなことから、体育・保健体育科の具体的な3つの目標を具現化するためには、児童生徒の体育学習への意欲を高めることが重要と考える。

前述の意識調査の結果に「仲間と一緒に学習し、達成感を感じるのが楽しいと感じていることがわかった」³⁾と記されており、仲間とのかかわりと児童生徒の体育学習への意欲の高まりが関連していることがわかる。また、考察に「先生の指導によっては、たとえ、運動が嫌いであっても、体育は好きになることを意味している」⁴⁾と記されており、子どもたちの意識から教師のかかわりの影響力を読み取ることができる。このことから、児童生徒の体育学習への意欲を高めるためには、仲間や教師のかかわりが大きな影響力をもつことが明らかである。

そこで、本研究会議では、「かかわりの充実」を図ることを柱にして授業づくりを行い、児童生徒の体育学習への意欲を高め、運動をすることの楽しさを感じられるような児童生徒を育てていきたいと考えた。そして、そのための授業づくりに取り組む上で、わかる（知識、思考・判断）ことを切り口として、「小学校と中学校のつながり」と「指導と評価の一体化」を大切にすることで、研究を深めていきたいと考え、次のような主題を設定した。

「かかわり」を考えた学習指導の工夫
～ 「運動大好き」「スポーツ大好き」という姿をめざして ～

1) 『小学校学習指導要領解説―体育編―』文部省 1999年 p.12

2) 『中学校学習指導要領解説―体育編―』文部省 1999年 p.16

3) 4) 『学校体育に関する児童生徒の意識調査～小学生の意識～』

神奈川県立体育センター 2005年 p.28・p.33

研究の内容

1 研究の仮説

研究主題を受け、次のように仮説を設定した。

教師が指導内容を明確にして指導することにより、児童生徒は学習内容を理解し、その知識を基にかかわりの充実を図り、体育学習への意欲を高める。

2 研究の構想

体育学習においては、自分が今何をしたらよいのかがわかることが大事であり、わかることで児童生徒は授業に対し安心感を抱くことができる。誰もが安心感を抱いて臨めるような授業づくりには、教師のかかわりが大きな影響を与える。そして、教師が適切な指導や支援などのかかわりをもつためには、指導内容を明確にすることが大切である。

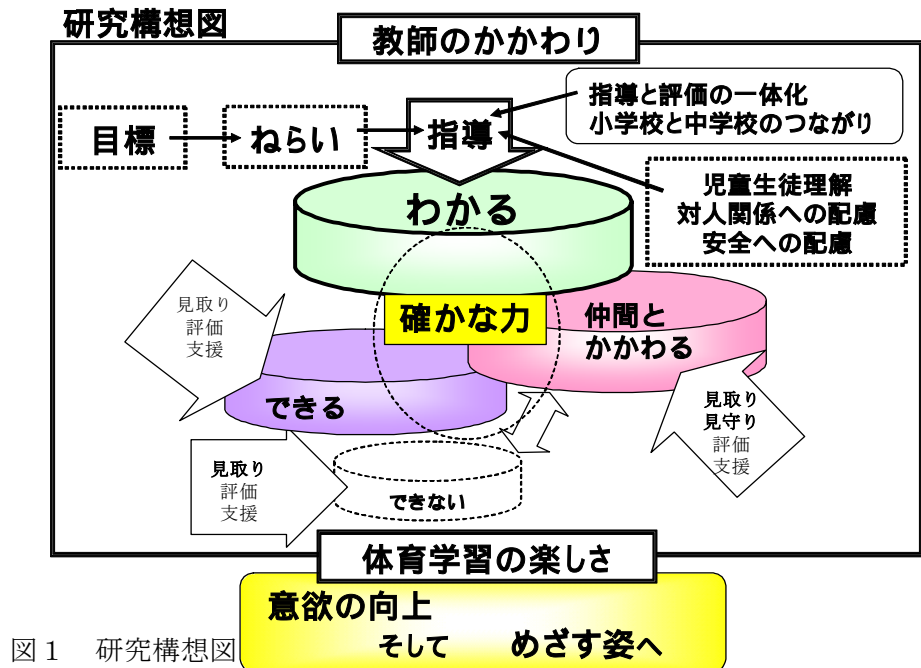


図1 研究構想図

本研究において、「わかる（知識，思考・判断）」ことを切り口とし、児童生徒が学習内容や指導のポイントを理解することを大切にする。その結果、児童生徒が、わかった（知識）ことを基に、友達と励まし合い、教え合うという「かかわり」が生まれる。また、わかる（知識）ことをきっかけとして、知識を共有させ、技能を向上させるなどという学び合いや高め合いへとつながっていくと考える。

さらに、教師が適切な指導や支援をすることにより、児童生徒はめあて（課題）を明確にすることができる。例えば、授業の中で「自分が今何をしたいのか」「何に対してアドバイスをしてほしいのか」などをはっきりとさせて授業に臨むことにより、友達と見合う視点が明確になり、学び合い高め合いの姿が生まれる。つまり、わかることで仲間とかわり、みんなと共に「できる」ようになる。この「わかる」－「かわる」－「できる」のサイクルが相互に関連することで、かかわりの充実を図ることができると思う。

その結果、児童生徒の体育学習への意欲が高まり、運動に親しもうとする思いがはぐくまれると推測する。その思いを経験することで、運動やスポーツを楽しむ機会が増え、「運動大好き」「スポーツ大好き」というめざす児童生徒の姿へとつながっていくと考える。そして、様々な運動やスポーツを通して、はぐくまれた仲間との関係や健康・安全の大切さに気づき、生涯を通じて運動やスポーツに親しむ態度が育っていくとも考える。

このようなことを基に、本研究におけるキーワードを「わかる（知識，思考・判断）」「かかわる（態度）」「できる（技能）」「指導と評価の一体化」「小学校と中学校のつながり」とした。そして、体育学習の中で大きな影響力をもつ「教師のかかわり」を、子どもたちの学びの姿を支える教師の行動という広い意味でとらえ、「教師のかかわり」に着目して研究を進めた。

3 研究の方向性

（１）学びのある授業づくり

教師が体育学習において楽しさを追及するあまり、子どもの自主性や主体性を重視し、指導を控えた授業を展開している実態がある。また、「運動のもつ特性に触れる」「技能が上達する」「人間関係をつくる」などといったねらいが、意図されていない授業が行われている実態もある。そのような授業において、児童生徒は授業に対しての満足感や達成感などを感じることができずにいる。そのために、運動することが好きな子どもの中から「体育の授業が楽しくない」というつぶやきも生まれ、学びのない授業が展開されてしまうこともある。

このような現状を受け、指導すべき内容や身につけさせるべきものが見直されるようになり、教師がそのことを意識しながら授業を行うようになっていく。しかし、小学校では、体育の指導を得意とする教師ばかりではなく、「いつ、何を、どのように伝えればよいのか…」などと教師が迷い、指導があいまいになってしまうことも否めない。また、中学校では、保健体育科教師が授業をする中で、あまり得意ではない領域を指導するときに、小学校教師と同じような迷いが生じ、適切な指導や支援をすることができなくなってしまうといった実態が挙げられる。

そこで、教師が指導すべき内容を系統立てて整理をし、明確なねらいを意図した上で、指導（学習）のポイントを明らかにすることが大切となる。そのことを通して、教師の迷いや指導のあいまいさが取り除かれ、適切な指導や支援ができるようになると思う。そして、児童生徒が満足感や達成感を感じられるようになり、体育学習への意欲を高めていくと考える。

（２）指導と評価の一体化

前述した意識調査の結果には、「体育の学習の楽しさと、つまらなさは表裏一体の関係にある。記録が伸びたり、できなかったことができるようになったときは楽しく、記録が伸びなかったり、練習してもうまくならなかったときはつまらないと回答したことから明確である」⁵⁾と、記されている。このことから、できるようになることやできたと感じることが、体育学習への意欲を左右する要因の一つであることがわかる。そこで、指導すべき内容等の見直しや指導と評価の一体化といった視点に立って、授業づくりに取り組むことが重要視されるようになっていく。

このことから、教師が学習目標や運動のもつ特性を理解し、目の前にいる児童生徒の現状や実態を踏まえて、指導内容の整理をしていくことが必要となる。つまり、「児童生徒の現状や実態にあった学習計画」・「ポイントを絞った指導内容」などを見直し、成長発達に応じた指導内容、教師の評価（見取り）、支援（アドバイス）の内容やタイミングを明らかにすることが大事となる（「目標→指導→評

⁵⁾ 『学校体育に関する児童生徒の意識調査～小学生の意識～』

べきなのかを、教師自身が理解していることが重要となる。

それらが明らかにされることによって、教師が的確な指導をすることができるようになり、指導内容に伴って評価規準も明確化され、支援も多様なものになる。その結果として、児童生徒の体育学習への意欲や理解（思考・判断）、技能などの面で様々な高まりが見られるようになると思う。

（３）小学校と中学校のつながり

最近では小・中学校の連携が叫ばれ、９年間を見通して指導していくべきであると言われるようになってきている。しかし、実際には、小学校では卒業までの６年間を区切りと考え、１年生からの技能の積み上げに目を向け、指導を繰り返してきた。そのため、小学校で身につけたものをどのように中学校へ結びつけていくのか、９年間という長いスパンでどのような姿に育ててほしいのかなどを考えることができなかった。

それゆえ、小学校では「中学校の体育学習につなげていくために６年間を通して身につけるべきことを系統立てて指導する」ことが、中学校では、「小学校で学習したことを基盤にしてより高いものをめざして指導する」ことが期待される。そして、義務教育９年間における指導（押さえるべき）内容を成長発達や学年に応じて作成し、系統立てて指導していくことにより、児童生徒はゆとりをもって授業に臨み、より豊かな学びが作り出される。そのことが、体育学習への意欲の高まりへつながると考える。

４ 研究の方法・内容

（１）研究の方法

「ボール運動」「球技」の系統表の作成 クリック

本研究を進めるに当たり、小学校「ボール運動」と中学校「球技」を対象領域とした。

小・中学校学習指導要領に書かれているボール運動と球技の領域における「技能」「態度」「学び方」の内容について、つながりを考えながら見直すことにより、次のようなことが見えてきた。

低学年では、「ゲーム」がもつ独自の楽しさを味わうことを通して、基本的な動き「投げる」「捕る」「転がす」「止める」「当てる」を身につけるようになってきている。中学年では、それらの技能面を土台にして「〇〇型ゲーム」へと発展させて、高学年では、より「球技」に近づけるために、今までに培った技能を生かしてゲームに参加する「ボール運動」となっている。そして、中学校では、小学校で身につけた技能を生かし、役割等を考えながら、スポーツとしての球技を楽しむようになってきている。つまり、小学校ではボールを扱うことを楽しむことからスタートし、中学校では競技としてスポーツを楽しむというつながりが見えてきた。

それらを踏まえて、ボール運動と球技のゲームの内容を系統立てて整理し、「ボール運動領域系統表」を作成した。

「パス・キャッチ」の内容の整理・系統表の作成 クリック

本研究では、ボール運動と球技の領域において必要な動きを「パス・キャッチ」としてとらえた。中学校学習指導要領のゲームの内容をゴールとして、どの段階（学年）で何を学び、何を身につけるべきなのかを考え、「パス・キャッチの系統表（表１）」を作成した。

表1 パス・キャッチの系統表

ゲームの内容からめざすパス・キャッチ

	ゲームの内容	パス・キャッチに関する内容		
		めざす姿	指導内容(技能)	わかってもらいたいこと(知識)
小学校	1年生 いろいろなボールで、ボールをつく、転がす、投げる、当てる、捕らえる、蹴る、止めるなどをして、簡単な規則をもとにボールゲームが楽しくできるようにする。	いろいろな方法で投げる目の前のボールを捕らえる(キャッチ)	いろいろな投げ方を体験させる。投げられたボールを止めたり、捕らえたりすることができる。 目標に向けて投げる(パスをする)ことができる。パスされたボールを受け取る(キャッチする)ことができる。	<パス> 片手で投げるには、手と反対の足を踏み出す。片手投げ、両手投げ、上手投げ、下手投げなど様々な方法がある。 <キャッチ> 確実に受け止めるには、両腕や胸を使う。
	3年生 コート内で攻守入り交じってボールを手で扱い、簡単な技能を身に付けて、ゲームが楽しくできるようにする。	方向を決めてパスをする。パスをキャッチして、次にパスやシュートをする。→ボールをつないで運ぶ。	攻める方向に向かってパスを出すことができる。ボールラインより前に移動してパスを受けることができる。 攻める方向や相手にマークされていない味方にパスを出すことができる。ボールラインより前に移動してパスを受け、パスやシュート・ドリブルをすることができる。	<パス> 相手が捕りやすいボールを投げるには、受け手を見て捕りやすい位置に投げる。速くに投げるには、踏み出した足に体重をのせる。 <キャッチ> 確実に受け止めるには、体の正面で捕る。次の動作につなげるには、手首を立てて捕る。
	5年生 攻守が入り交じって行うゲームの特性に応じて、チーム内の攻防の役割を分担し、パスやドリブルを使ってボールを運びシュートする技能や防御の仕方を身に付けてゲームをする。	味方や相手に応じて、的確なパスを出す。受け手は、受けやすい位置に動いてボールを受け、パスをつなぐ。状況に応じたパスをする。	状況に応じてパスを出す位置やパスの種類を変えることができる。スペースに走り、パスをキャッチすることができる。 空いているスペースに味方が受けやすいパスを出すことができる。スペースに出されたパスを動きながらキャッチして、次のプレー(パス・シュート・ドリブル)につなげることができる。	<パス> 走っている味方にパスをするには、受け手の進行方向にボールを投げる。 <キャッチ> スムーズなプレーにつなげるには、次の動きがしやすい位置で捕る。
	6年生			
	1年生			
	2年生	集団的技能や個人的技能の程度に応じて、チームの広さ、ゲームの時間、コート、コート、コート、コート等について工夫し、作戦を立ててゲームができる。	ビポットなどを使い、対応関係ははずしながら、パスやキャッチをする。	状況に応じてビポットなどを使い、確実なパスを味方に出すことができる。フェイントなどを使い相手をふりきってパスをキャッチし、次のプレー(パス・シュート・ドリブル)につなげることができる。 状況に応じてビポットなどを使い、確実なパスを味方に出したあとに、空いているスペースに動くことができる。(パス&ラン)相手との対抗関係ははずすためにフェイントやミートなどを使ってキャッチをし、次のプレー(パス・シュート・ドリブル)につなげることができる。
3年生				

**味方や相手に応じて的確なパスを出す。
受け手は、受けやすい位置に動いてボールを受け、パスをつなぐ。
状況に応じたパスをする。**

指導内容の整理 クリック(ハンドボール指導・評価計画表, バスケットボール指導・評価計画表)

教師が指導と評価の一体化という視点に立って、授業に取り組めるようにするためには、1時間ごとの指導内容の整理が必要である。また、その内容に併せた評価項目や教師の支援についても整理する必要がある。そこで、本研究では、教師が児童生徒に何を学ばせたいのか、何を身につけさせるべきなのかを明確にして、「ハンドボール指導・評価計画表」「バスケットボール指導・評価計画表」を作成した。

提示物の作成

児童生徒が学習内容や指導ポイントを理解し、その理解したこと(知識)を基に、友達と励まし合い教え合う姿が生まれる授業が大切である。教師が、児童生徒に学ばせたい内容や身につけさせたいことを整理し、提示しながら指導に当たるために、提示物を作成した。

自己評価カード(表2)の作成 クリック

自己評価カード(ハンドボール, バスケットボール) アンケート(ハンドボール, バスケットボール)

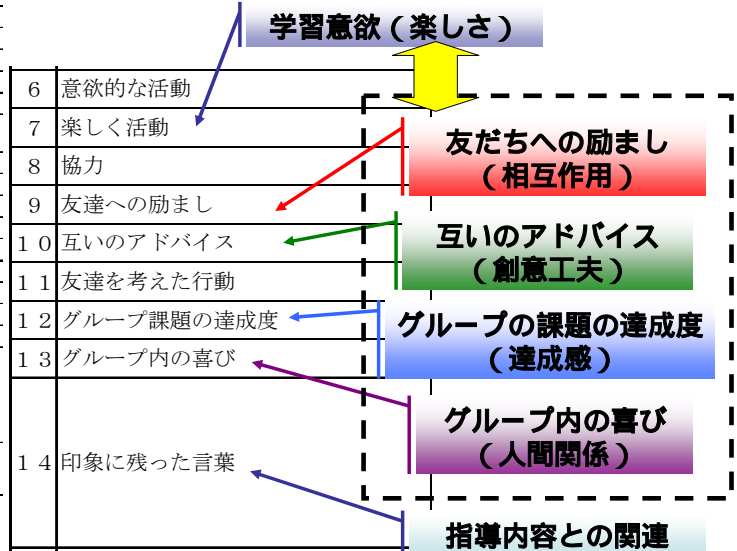
児童生徒が体育学習に望む内容やかかわりに関連する意識の変容を見取るためのアンケートを作成した。そのアンケートを「導入(診断的評価)」「経過(形成的評価)」「まとめ(総括的評価)」の段階で実施し、自己評価カードに5段階で評価して記入させた。その内容から、「かかわり」と密接な関係にある「友達への励ましー相互作用ー(質問9)」「互いのアドバイスー創意工夫ー(質問10)」「グルー

ブ課題の達成度－達成感－（質問 12）」「グループ内の喜び－人間関係－（質問 13）」の 4 項目と意欲－楽しく活動－（質問 7）の意識の変容についての関連を読み取るようにした。また、授業の中で、児童生徒同士や児童生徒と教師の間で交わされた（印象に残った）言葉を記入する欄（質問 14）を設

表 2 自己評価カード

ハンドボール自己評価カード		年 組 名前																			
		導入					経過 1					経過 2					まとめ				
1	授業で望む内容について、番号を記入しましょう。																				
2	どのようなチームでゲームに取り組みたいのかを番号で記入しましょう。																				
3	①パス	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	②キャッチ	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	③シュート	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	④ドリブル	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	⑤ゴールキーピング	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	⑥進攻	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	⑦ポストプレー	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	⑧マンツーマンディフェンス	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
	⑨ゾーンディフェンス	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
4	個人目標																				
5	個人目標の達成度	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
6	意欲的な活動	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
7	楽しく活動	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
8	協力	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
9	友達への励まし	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
10	互いのアドバイス	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
11	友達を考えた行動	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
12	グループ課題の達成度	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
13	グループ内の喜び	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
14	印象に残った言葉	先生・さん					先生・さん														
15	今後の授業に向けて																				

け、そこから「かかわる」内容についても見取るようにした。併せて、教師が指導したことと技能への意識の変容も読み取るようにした。



学習カードの作成

指導と評価の一体化という点からも、児童生徒が学習した内容を理解することが大切であると考えた。そのために、毎時間の指導ポイントを明記し、教師が意図し指導したことが児童生徒に伝わるように工夫をして、学習カードを作成した。また、児童生徒が主体的に学ぼうとする姿勢を育てるといふねらいで、学習カードに「運動のもつ特性」「学習の流れ」「学習のポイント」などを載せた。さらに、評価計画に基づいて自己評価ができるようにも工夫した。

(2) 授業研究の実施

研究対象・内容

川崎市内中学校 1 校 1 学年 3 学級男子生徒 「ハンドボール」

川崎市内小学校 1 校 6 学年 3 学級全児童 「バスケットボール」

研修員が担任する児童を含む川崎市内小学校 6 学年の全児童と、研修員が担当する川崎市内中学校 1 学年男子を対象とした。

中学校では 1 年生のみ男女別習ということから、男子生徒のみで「ハンドボール」の授業を実施した。また、小学校では、一学級あたりの人数が少ないことと、よりしっかりと見取りをできるようにするために、3 学級を 2 グループに分け T・T (ティーム・ティーチング) 形式とした。そして、研修員が T 1 となり他学級 6 年担任が T 2 となって「バスケットボール」の授業を実施した。

実施時期 (10 月～12 月)

川崎市内中学校 1 年 「ハンドボール」 10 月～11 月 (14 時間扱い)

川崎市内小学校 6 年 「バスケットボール」 11 月～12 月 (8 時間扱い)

(3) 見取りの方法

授業記録・授業者への聞き取り

所属校研修員を授業者として、観察者（長期研修員、研修員）による授業観察を行った。また、観察者がビデオカメラを使用して、児童生徒の変容を追えるように授業の記録を行った。

授業後には、「わかる」「かかわる」「できる」などの視点から授業者と振り返りを行い、授業者が気づいたことや観察者が見取ったことを基に話し合い、次時の授業に生かした。

自己評価カード

授業についてのアンケートを、中学校では「導入（診断的評価）」「経過（形成的評価）1」「経過2」「まとめ（総括的評価）」と単元を通して4回実施し、小学校では「導入」「経過」「まとめ」と単元を通して3回実施した。

児童生徒の意識の変容を数値化したものをグラフに表し、その結果と授業の様子を照らし合わせ、次時の授業の改善点を見いだした。

学習カード

学習終了後、児童生徒は指導のポイントにそって振り返りを行い、学習カードに記入した。教師は、その内容から「指導したことを児童生徒が理解していたのか」「理解したことを基にして、児童生徒がどのようなかかわりをしていったのか」などを見直した。また、児童生徒の自己評価と教師の見取りと照らし合わせた。

5 検証授業1：中学校1年「ハンドボール」

(1) 「わかる」を大切にする指導

学習のはじめの段階で、学習カードを使いながら生徒にねらいや学習の流れ等を理解させた。そして、基本の動きであるパス&キャッチ・シュートについては、「動き」や「フォーム」「タイミング」を理解させ、導入や練習を通して、ゲームに結びつけようと考えた。

表3 ハンドボール学習の道すじ

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
学習活動	①オリエンテーション ・学習のねらいと道すじ ・学習ノートの使い方 ・グルーピング（役割分担） ②学習の進め方 ・用具の準備やマナーの確認 ③基本の動きの理解 ・パス&キャッチ ③基本の動きの理解 ・シュート				ねらい1 今できる技能で思いっきりゲームを行う 課題練習→ゲームA ⑤速攻 ・2対1, 3対2 ⑥ポストプレー ・パス→シュート ⑦チームディフェンス ・マンツーマン ・ゾーン			ねらい2 相手に応じた攻防の作戦を立てたゲームを行う 作戦に応じた課題練習→ゲームB ⑧⑨⑩自分の役割を果たす ⑪⑫⑬チームの特徴を出す					まとめ	
学習の流れ	準備運動 個人・チームの技能練習 課題練習				ゲームに慣れる				ゲームA				ゲームB	

学習の「ねらい1」の段階では、中学校1年で初めてハンドボールを体験するということもあり、ゲームの中で使う動きを課題練習として提示した。全員が動きを理解することで、ゲームにおける生徒の意欲や態度に変化が生まれると考えた。また、そのことにより、教師の評価や見取りを容易にし、教師だけでなく生徒が互いに何を視点としてゲームを見ていけばよいか分かり、自然と声かけやアドバスの姿が見られるようになると推測した。

学習の「ねらい2」の段階では、主体的な学びをねらいとするため、チームの作戦に応じた課題練習を選択させた。そして、チームの課題を理解し、解決方法を選択したり考えたりできるように指導や支援をしながら、最終的に課題解決学習をめざしていくようにした。

このような考えを基にし、次のような学習の道すじ（表3）で授業を行った。また、指導と評価の一体化という視点に立って、指導・評価計画表を作成した。

（2）集団への意識と学習意欲

分析結果

中学校1学年の3学級男子生徒の意識の変容をグラフに表したものが図2である。

グラフの項目「意欲」「相互作用」「創意工夫（思考判断）」「達成感」「人間関係」は、アンケートの質問7・9・10・12・13をそれぞれ5段階で自己評価したものの平均である。

相互作用－友達の励まし－（質問9）は、1.8→2.2→3.1→3.1と変容し、導入とまとめの間で1.3もの高まりが見られた。創意工夫－互いのアドバイス－（質問10）は、1.4→2.1→3.9→3.9と変容し、導入とまとめの間で1.5もの高まりが見られた。達成感－グループ課題の達成度－（質問12）は、1.3→2.3→2.9→2.9と変容し、導入とまとめの間で1.6もの高まりが見られた。人間関係－グループ内の喜び－（質問13）は、1.4→2.5→3.0→3.0と変容し、導入とまとめの間で1.6もの高まりが見られた。4つの項目では、同じような数値で同じような高まり方をした。また、創意工夫と達成感、人間関係については、導入から経過1の段階で著しい変容が見られたが、相互作用は導入から経過1の段階に比べ、経過1から経過2の段階で著しい変容が見られた。しかし、どれも経過2とまとめの間には、数値的な変容は見られなかった。

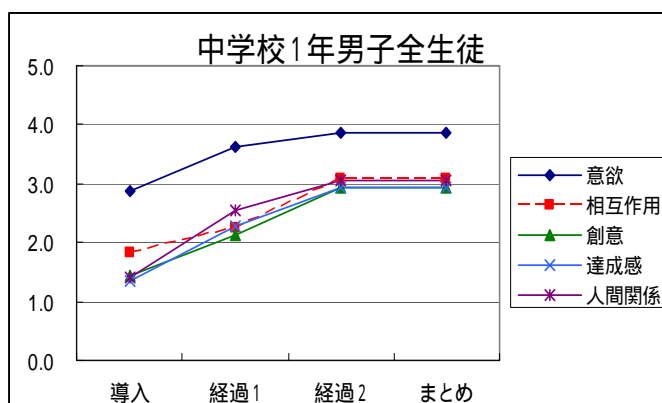


図2 意識の変容

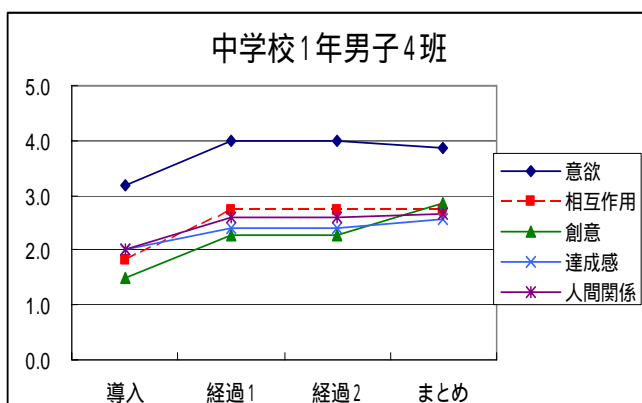


図3 意識の変容（4班）

意欲－楽しく活動－（質問7）については、2.9→3.6→3.6→3.9と変容し数値的には違うが、同じような傾きで高まりが見られた。導入から経過1の段階で著しい変容が見られ、創意工夫と達成感、人間関係と同じような傾きが見られた。

5つの項目のどれもが、経過2とまとめの段階では、数値的な変容は見られなかった。

パスとキャッチが苦手な生徒のいる4班の意識の変容をグラフに表したものが図3である。

導入とまとめでは、どの項目にも高まりが見られたが、経過1から経過2では、全く高まりが見られなかった。それだけでなく、経過2からまとめでは、創意工夫のみに大きな変容が見られただけで、他の4項目については、ほぼ横這い状態であった。また、意欲以外の4項目については、1年男子全生徒の数値に比べ、いずれも低い数値になっていた。

「ボール運動はやりたくない」と言っている生徒がいる5班の意識の変容をグラフに表したものが図4である。

意欲と相互作用は、1年男子全生徒のグラフとほぼ同じような高まりが見られた。創意工夫については、導入から経過1の段階ではほぼ横這い状態だったが、経過1から経過2の段階で1.0と著しい高まりが見られた。達成感については、導入から経過1の段階で1.1と著しい高まりが見られた。そして、達成感とい人間関係の数値の変容は、経過1からまとめの間で全く同じであった。

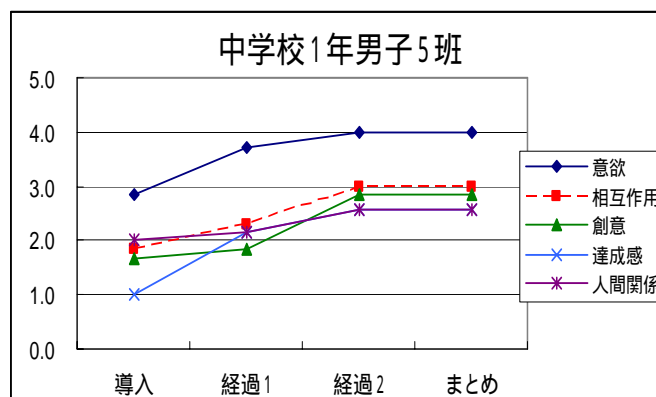


図4 意識の変容 (5班)

考察

相互作用、創意工夫、達成感、人間関係が同じような数値で同じような高まり方をしていたことから、4項目それぞれが関連していると推察できる。このことから、生徒が「互いにほめたり励ましたりできるようになった」「アドバイスができるようになった」と感じるようになると、「課題を実践したり解決したりできた」「課題が解決できたときに喜び合うことができた」と感じられるようになることがわかった。また、意欲の高まり方も同じような傾きを表していることから、意欲と4項目が深く関連していることもわかった。

導入から経過1の段階で、創意工夫と達成感、人間関係に著しい変容が見られた。初めてハンドボールを体験し、新しいことを学ぶことに楽しさを感じていたと考える。授業の中で、教師が指導した内容を生徒が理解し、その知識をもって互いにほめたりアドバイスをしたりする姿が見られた。そして、その姿を教師が見取り評価したことが、数値の高まりへとつながったと考える。また、5つの項目のどれもが、経過2とまとめの段階で数値的な変容は見られなかった。要因としては、次の2つのことが考えられる。第一に、学習計画上で授業の間隔が空いてしまい、学習内容を思い出すころには1時間の授業が終わってしまったことである。第二に、それぞれのチームが勝敗にこだわりながらも、作戦がうまく機能しなくなっていたことで、生徒の気持ちが受身になってしまったことである。

この要因を取り除くためには、様々なことを見通した指導計画を立てる必要があると考える。作戦がうまく機能しなくなったときに、「どうしたら勝てるのか」「勝つためにはチームでどうしたらよいのか」と、課題解決ができるような刺激を与えるような指導計画を立てることが必要だったのではないかと考える。そうすることで、チームとしての課題を解決するという次の楽しさにつながるのではないかと考える。また、次年度へのつながりや3年間を見通した押さえ(まとめ)をしていくことも必要である。

(3) 指導内容と意識

分析結果

集団的技能では、指導内容と併せてオフェンスとディフェンスの2項目についてアンケートをとり、1年男子全生徒の意識の変容を平均値化したものが図5である。

どの項目にも、生徒の中に「できる」「できるようになっている」という意識の高まりが見られた。ここで注目するのは、ゾーンディフェンスである。導入から経過1の段階では、

数値が横這い状態だったのに対して、経過1から経過2の段階において2.3→3.1と著しい高まりが見られた。そして、最終的には1.2という変容が見られた。

速攻は数値の変容は小さいものの、他の3項目よりも高い数値を示している。ポストとマンツーマンについては、緩やかではあるが数値の高まりが見られた。

集団技能については、班ごとに分析を行うと、全く違う結果になるところもあった。

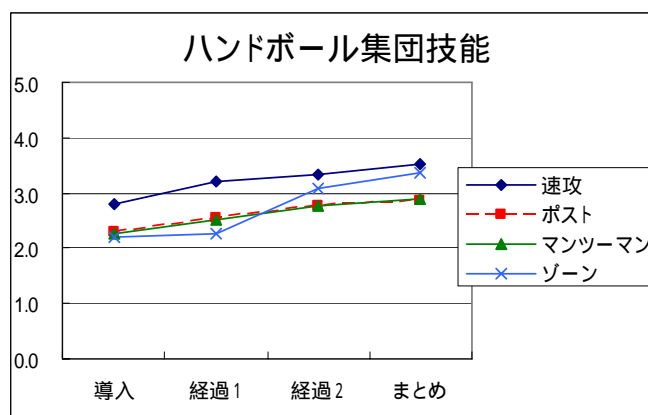


図5 技能に対する意識の変容

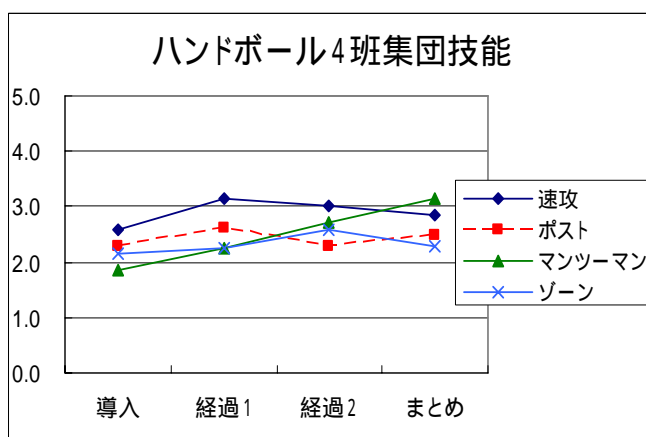


図6 技能に対する意識の変容 (4班)

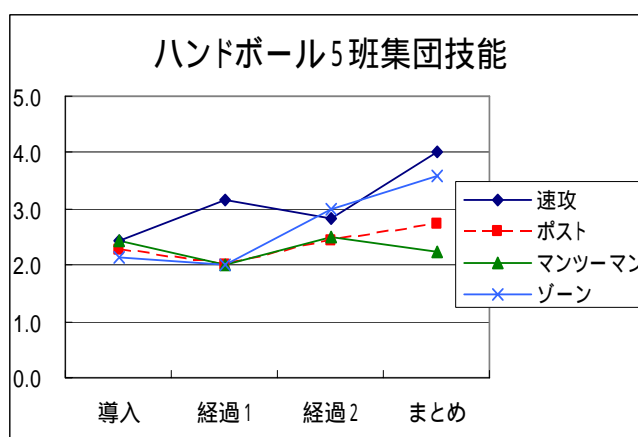


図7 技能に対する意識の変容 (5班)

図6の4班では、マンツーマンへの意識の高まりが数値に表れた。速攻については、導入からまとめの間で、数値の高まりを見せているが、経過1をピークに数値が下がった。ゾーンは経過2をピークに、数値が下がった。

一方、図7の5班では、マンツーマンへの意識が最終的に導入よりも数値が下がった。しかし、他の3項目については数値の高まりが見られた。その中でも、速攻への意識は経過2で一時的に低い数値を表したものの、まとめの段階で4.0と著しい変容が見られた。また、ゾーンへの意識も2.1→3.6と数値の高まりが大きかった。

考察

単元を通して、個人的技能では「パス」「キャッチ」「シュート」を、集団的技能では「速攻」「ポスト」「マンツーマン」「ゾーン」を中心に指導した。全員が動きを理解して、チームの中で役割を果たせるようにするという点から、集団的技能の「速攻」と「ゾーン」に重点を置いた。そのことが、生徒の意識の変容に反映していることが図5からもわかる。つまり、教師のかかわりが生徒の意識の変容と大きく関連しているのである。

また、特に、5班の意識の変容から、教師のかかわりとの関連をはっきりと読み取ることができる。速攻については導入から経過1までの間に重点を置き、ゾーンについては経過1から経過2の間に重点を置いて指導した。そのことにより、生徒自身が練習やゲームの中で何をすべきなのかがわかり、全体的な課題に対する意欲的な取組が見られた。そして、その取組に対して、教師が見取って評価し、支援をするということが繰り返された結果といえる。

しかし、4班のように重点的に指導した後には数値の高まりが見られても、最終的に数値が下がってしまうこともある。課題としたことがうまくゲームの中に反映されなかったり、実践できなかったりしたことが要因と考える。球技の場合、課題を明確にして練習を行っても、相手チームによっては、練習したことがゲームで発揮できない状況もある。そのことが、生徒の意識の変容に影響を与えていると考えられる。教師がこのような生徒の意識をタイムリーに受け止め、支援していく必要があると考える。

技能と集団意識や学習意欲の関連も、密接であることが考えられる。生徒が「わかる」「(もう少しで)できる」という肯定的な思いを抱くことが、意欲の高まりへとつながっている。また、反対に否定的な思いを抱くことで、意欲が低下することを意味している。このことは、図6(4班)・図7(5班)を比較することで読み取ることができる。

6 検証授業2：小学校6年「バスケットボール」

(1)「わかる」を大切にする指導

学習のはじめに、学習をよりスムーズに行うために、準備運動→課題提示→チーム練習→3対3→ゲームという学習の流れを説明し、理解させた。

前半では、ゲームを成立させるための技能である「パス・キャッチ」を指導した。併せて、速攻を基本とした動きや速攻ができなかったときの動きを課題として、1時間に一つずつ提示しながら、指導を行った。

後半では、チームの作戦へ結びつけるために、前半で提示した課題をチームで選択させた。また、基本の動きである速攻につながるような守りについて、指導を加えた。

そして、指導と評価の一体化という視点に立って、指導・評価計画表を作成し、子どもたちが互いに見合い、教え合うことができるようになることをめざした。

(2) 集団への意識と学習意欲

分析結果

小学校6学年の3学級全児童の意識の変容をグラフに表したものが図8である。

グラフの項目「意欲」「相互作用」「創意工夫(思考判断)」「達成感」「人間関係」は、アンケートの質問7・9・10・12・13をそれぞれ5段階で自己評価したものの平均である。

相互作用－友達の励まし－(質問9)は、2.7→2.9→3.1と変容し、導入とまとめの間では0.4

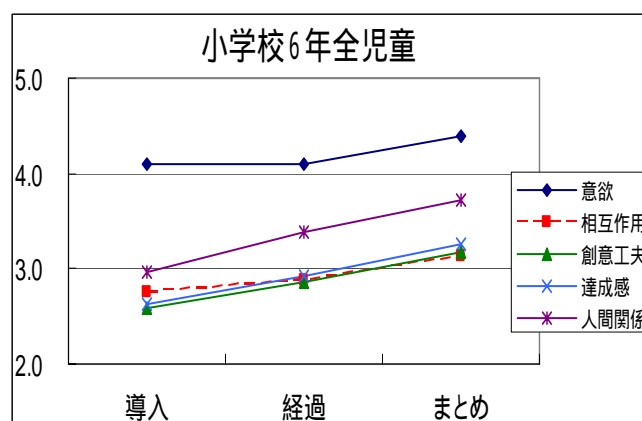


図8 意識の変容

の高まりが見られた。創意工夫－互いのアドバイス－（質問 10）は、2.6→2.9→3.2 と変容し、導入とまとめの間で 0.6 の高まりが見られた。達成感－グループ課題の達成度－（質問 12）は、2.6→2.9→3.3 と変容し、導入とまとめの間で 0.7 の高まりが見られた。この 3 つの項目については、ほぼ同じような数値で同じような高まり方を示した。そして、人間関係－グループ内の喜び－（質問 13）は 3.0→3.4→3.7 と変容し、導入とまとめの間で 0.7 の高まりが見られた。数値に違いはあるが、人間関係でも同じような傾きで数値の高まりが見られた。

また、意欲－楽しく活動－（質問 7）については、はじめから 4.1 という高い数値を表していることから、学習への期待が伺えた。そのため、4.1→4.1→4.4 と導入・経過と高まりが見られず、まとめの段階になっても数値の高まりが 0.4 と変容の幅が小さかった。しかし、どのチームも同じような結果になったわけではない。

図 9 は、A グループ青チームの意識の変容を表したものである。相互作用の数値が、3.4→3.6→3.6 と大きな変容は見られなかったが、達成感の数値は 3.3→3.3→3.9、人間関係の数値は 3.6→3.7→4.6 と、多少ではあるが数値の高まりがある。また、意欲の数値については 4.6→4.4→4.9 と最終的には高まりが見られたものの、経過の段階では数値が一時下がった。

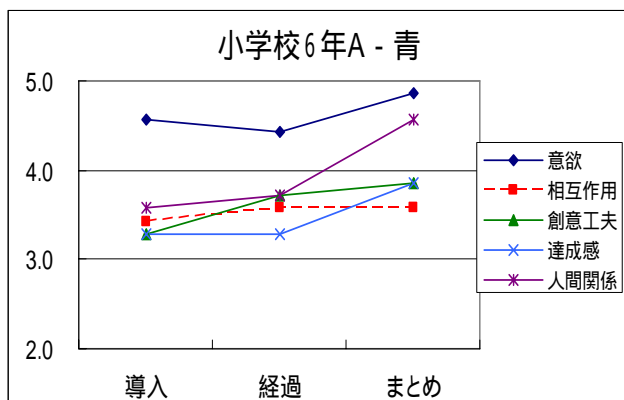


図 9 意識の変容 (A - 青)

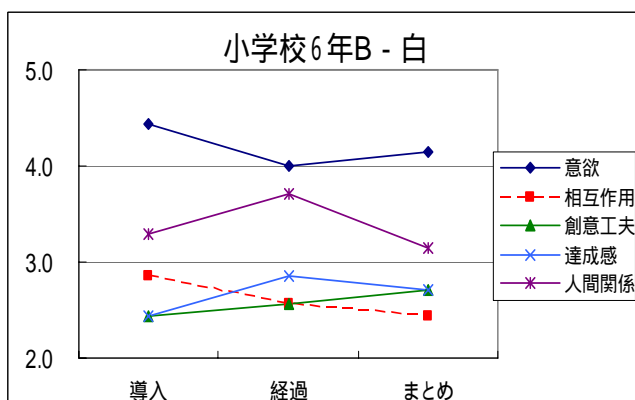


図 10 意識の変容 (B - 白)

次に、図 10 の B グループ白チームでは、まとめの段階で 5 項目中の 3 項目において数値が下がった。相互作用の数値は、2.9→2.6→2.4 と徐々に下がり、導入とまとめを比較すると 0.5 も下がった。人間関係の数値は、3.3→3.7→3.1 と一度高まりを見せたものの最終的には数値が下がった。導入とまとめで比較すると 0.2 の差であるが、経過とまとめで比較すると 0.6 もの差が見られた。意欲の数値は、4.4→4.0→4.1 と経過からまとめの段階で数値の高まりが見られたが、導入とまとめを比較すると 0.3 下がった。

また、残りの 2 項目（創意工夫・達成感）についても、一度高まったにもかかわらず、数値が下がったり、ほぼ横這いになったりした。

考察

相互作用と創意工夫、達成感がほぼ同じような数値で同じような変容をしていることから、それぞれ 3 項目が密接な関係にあると推察できる。また、人間関係も前述した 3 項目との関連が高い。つまり、互いに励ましたりアドバイスしたりできるようになることで、協力して課題を解決しようとしたり、解決できたときに喜び合えたりできるようになる。そして、図 9 と図 10 から読み取れるように、意欲の変容は相互作用と創意工夫、達成感の意識の変容と関連があると考えられる。

A グループ青チーム (図 9) の経過の数値に着目すると、相互作用の数値はほぼ横這い状態にあり、

達成感と人間関係については大きな変容が見られなかった。また、そのときの意欲の数値については下がる傾向にあった。これは、課題を理解して取り組んではいるものの、うまくできないという児童の思いが原因と考えられる。しかし、まとめの段階では、チームの課題が達成できる場面が少しずつ増え、満足感や達成感を味わうことができるようになった。また、その姿を教師が見取り、評価したことが、自信となり意欲の高まりにつながったと考えられる。

B グループ白チーム（図 10）のまとめの数値に着目すると、まとめの段階で相互作用と人間関係、意欲の数値が下がった。授業の様子から、「課題練習で何をすべきなのか」を考える姿、「課題にしたことをゲームで取り組もう」とする姿があまり見られなかった。他のチームに比べ明確な課題をもたずに練習やゲームに参加していたために、相互作用と人間関係の数値が下がり、それに併せて意欲の数値も下がったのではないかと考える。

以上の点から、相互作用、創意工夫、達成感、人間関係が相互に関連するとともに、学習に対する意欲とも密接な関係があることがわかる。

（3）指導内容と意識

分析結果

指導内容のパス、キャッチ、シュート、守りにドリブルを加え、技能についてのアンケートをとり、6年全児童の意識の変容を平均したものが図 11 である。

どの項目でも「できる」と「できるようになっている」という意識の高まりが見られた。パスとキャッチの数値の変容に着目すると、いずれも 2.9→3.2→3.6 と全く同じ数値で、導入からまとめまでの間に 0.7 の高まりが見られた。

守りは、導入から経過までの間では 0.3 の高まりだったのに対し、経過からまとめまでの間には 0.6 の高まりが見られた。また、ドリブルでは、導入から経過までは 2.8 のままで変容は見られなかったが、他に比べると変容の幅は小さいものの、まとめの段階で 3.2 に伸びた。

考察

単元のはじめの段階で「パス」と「キャッチ」の基本的な技能を、単元を通して「どんなパスを出したらよいのか」ということを指導や支援した。その結果が、パス・キャッチの数値の高まりにつながっていると考えられる。また、この 2 項目と達成感の数値の傾きが同様になっているのは、パス・キャッチが基本となり、ゲームにおける課題が解決できたためと考えられる。

守りについては、単元の半ばから指導して、「切り替えを早くする」とことと「自分のマークを意識する」ことを意識させながら支援をしたことで、経過からまとめの段階での伸びにつながったと思われる。

ドリブルについては、ゲームの中で必要な場面で使うとよいという程度の指導にとどめた。授業の様子からも見取ることができたが、前半ではドリブルを使う姿はほとんど見られず、後半になって必要に応じてドリブルを使う姿が見られた。その結果、数値に変容があったと考えられる。

これらのことから、教師が指導した内容を、児童が「技能を身につけることができた」「（もう少し

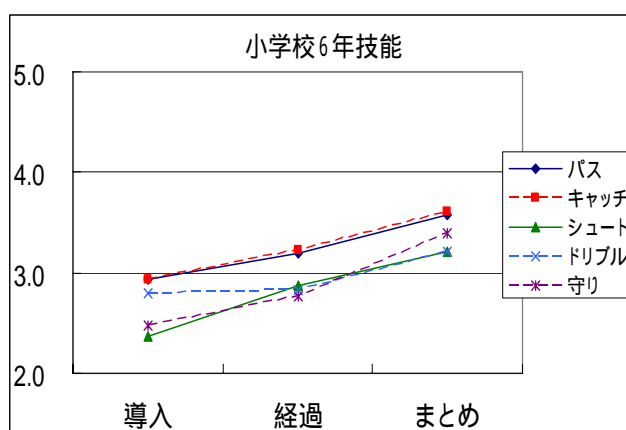


図 11 技能に対する意識の変容

で) できる」と実感できたとき、児童は達成感を味わい、チーム内の人間関係をより充実させ次の学習への意欲につなげることができると考える。

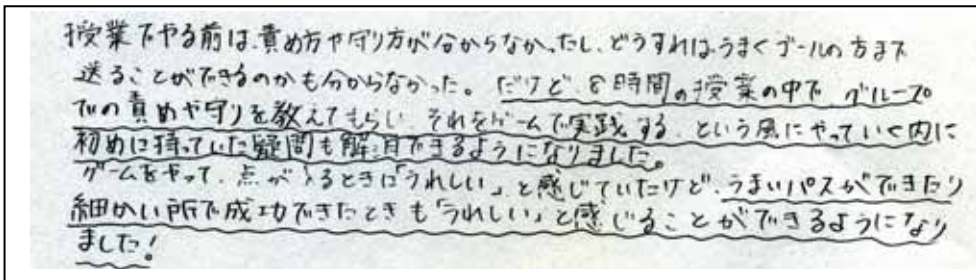


図 12 児童の感想①

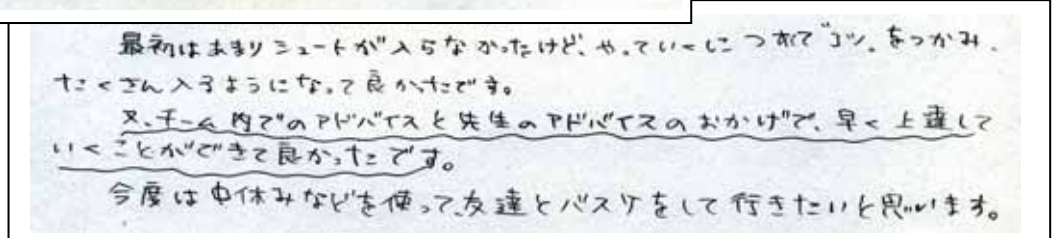


図 13 児童の感想②

研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

本研究では、児童生徒が意欲的に体育学習に取り組むためには、わかる（知識，思考・判断）ことを切り口とし、「小学校と中学校のつながり」と「指導と評価の一体化」を大切にすることが重要であると考え、検証を進めてきた。また、仲間や教師のかかわりが大きな影響力をもつと考え、「かかわりの充実」を図ることを柱として授業づくりに取り組んできた。

「わかる（知識，思考・判断）」ことを切り口としたことにより、教師が児童生徒の実態や学習指導要領に沿った指導内容を考え、教師が適切な指導や支援ができるようになった。そして、教師がその知識を基に具体的なかかわりをするにより、児童生徒が学習内容や指導ポイントを理解できるようになった。また、児童生徒が、わかった（知識）ことを基に、友達と励まし合い教え合うなどの仲間とかかわる姿が多く見られるようになった。さらには、そのことを通して得た知識を基に技能を向上させ、その技能を生かして、仲間とかかわる姿も見られるようになった。

一方、小学校と中学校のつながりを考えて指導内容を整理することにより、教師自身が気持ちや時間にゆとりをもって授業に臨め、より学びのある授業が展開される結果となることがわかった。そして、授業を通して、技能を身につける段階にある小学校では、教師とのかかわりが強く、技能を高める段階にある中学校では、班長やキャプテンといったリーダーとのかかわりが強いなど、仲間や教師とのかかわり方に違いがあることが見えてきた。この違いは、児童生徒の成長や発達に関係することもあるが、学習指導要領に示されている内容の違いでもあると思われる。

本研究において、「わかる」を切り口にしたことにより、「わかる」－「かかわる」－「できる」のサイクルが相互に関連して、かかわりの充実が図れるようになり、併せて、児童生徒が自信や満足感などを感じて、新たな運動の楽しさにつなげることができたと考える。

2 今後の課題

1年間の研究から見えてきたことは、「わかる」と「小学校と中学校の連携を図る」ことの大切さである。

今までの体育学習では、「できる」ということに着目することが多く、そのことは児童生徒の体育学

習への意欲と大きく関連していた。しかし、本研究を終えて、「わかる」ことにより「かかわりの充実」が図られ、そのことが学習意欲や技能の向上へとつながること、また、「わかる」ことにより、学びのある授業が展開されることが見えてきた。

学びのある授業を展開する上では、「教師のかかわり」が不可欠であり、教師が適切な指導に当たり、適時性を見極めて的確な支援やかかわりをもつことで、より学びのある授業の展開へつなげることができる。そのためにも、教師自身が「わかる」ことを大切にして、指導力を向上させていくことが、今後さらに必要になると考える。

本研究では、小学校と中学校の連携を図りながら、義務教育9年間という長いスパンの中で育てたい姿を見だし、指導内容を整理しながら、成長発達や学年に応じた系統表を作成した。また、指導内容を整理することにより、教師自身が気持ちや時間にゆとりをもって授業に臨めることで、より学びのある授業を展開することができた。このことが、ゆとりある教育につながるのではないかと考える。

以上のことから、「わかる」ことを切り口にしながら、ボール運動・球技の領域だけでなくすべての領域において、9年間を見通した指導内容を見直し、指導計画や評価計画等を作成していくことが必要と考える。また、小学校と中学校のつながりを見据えた指導内容を考えるような研究や研修を深めることが今後の課題である。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考・引用文献】

- | | |
|---|-------|
| 文部省『小学校学習指導要領解説－体育編－』 | 1999年 |
| 文部省『中学校学習指導要領解説－保健体育編－』 | 1999年 |
| 中央審議会 | |
| 『これまでの審議の状況－すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？』 | 2005年 |
| 高橋健夫『体育の授業を創る－創造的な体育教材研究のために－』明和出版 | 1994年 |
| 高橋健夫『体育授業を観察評価する』明和出版 | 2003年 |
| 神奈川県立体育センター | |
| 『平成17年度学校体育に関する児童生徒の意識調査～小学生の意識～』 | 2006年 |
| 文部省『中学校保健体育指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』 | 1991年 |
| 細江文利・池田瀬『中学校保健体育の評価・授業改善と通信簿』明治図書 | 1995年 |
| 本村清人『中学校保健体育科の指導と評価』暁教育図書 | 2004年 |

【指導助言者】

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 横浜国立大学教授 | 落合 優 |
| 筑波大学副学長 | 高橋 健夫 |
| 川崎市立小学校体育研究会長（川崎市立王禅寺小学校長） | 高橋 稔 |
| 川崎市立中学校教育研究会保健体育科部会長（川崎市立川中島中学校長） | 高井 明 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 大内 孝二 |